



2000 年 (平成 12 年)
5 月号 (No. 660)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円

目次

「日中学生友好登山」計画 …… 1

ルートファインディング考・上 …… 2

海外の山 …… 5

報告

総務委・新入会員オリエンテーション開催 …… 6

図書委・山岳史懇談会 …… 6

海外連絡委・カナダ山岳会会長の来日/曾曙生主席の歓迎会/タシ・ザンブー氏が当会に …… 8

赤シャツ土曜会・会則ができました …… 8

「秩父宮記念山岳賞」推薦受付中 7

支部だより・北海道支部 …… 9

東西南北

日本山岳会発祥の場所が判明 10

「彷徨の歌」その後 …… 10

田口二郎氏の「山の生涯」とアイガーヴァントをめぐる …… 3・12

図書紹介 …… 14

「尾瀬の総合研究」「運命の雪後」「山の憶い出」「ぶらり・山と花のひとり旅」「森への憧憬」「大和まほろばの山旅」

会務報告 …… 16

山岳博物館散歩・1 …… 17

INFORMATION …… 18

ルーム日誌 …… 19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第 2、第 4 土曜日 …… 閉室
第 1、第 3、第 5 土曜日 …… 10~18時

「日中学生友好登山」計画

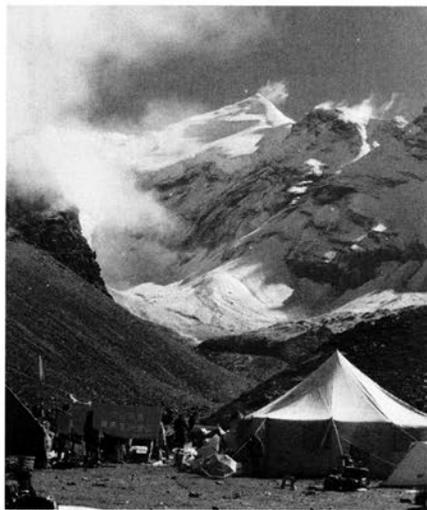
—二〇〇〇年秋、北アルプスで—

学生部指導委員会

本年(二〇〇〇年)は、JACと中国登山協会による日中友好登山二十周年の記念すべき年にあたるため、現在、検討メンバーによる「日中友

好登山二十周年記念事業」の計画が、中国側の意向を考慮しつつ進められている。

学生部では、昨年、中国・四川省



昨年中国で実施された日中学生友好登山「雪宝頂」BC

の「雪宝頂」(五五八八メートル)登山を中心として実施された「日中学生友好登山隊」の二回目を二十周年記念事業のひとつとして、本年秋季、北アルプスで展開すべく計画している。二〇〇〇年計画は、昨年とは逆に中国の学生たちに日本にきていただき、日本の学生たちと一緒に日本の山を体

験してもらおうとするものである。

名称 「日中学生友好登山隊・二〇〇〇—

時期 二〇〇〇年九月中旬〜十月頃

内容 北アルプス・穂高岳(または

剣岳)周辺の登山および東京・松本(または富山)での

体験学習

参加人数 日本側・中国側とも学生

各十名程度、学生担当委員若干名

次代を担う両国の学生が、交流を通じてひとつの目的に向かって行動することに意義を見出すとともに、山のみでなく、日本の文化・歴史にもぜひ接してもらいたいと考え、都市での体験学習も組み入れられている。すでに中国側からの問い合わせもきており、二十周年記念事業の検討

結果を待つて、議定書の締結等具体的な準備に着手する予定である。学生部の諸君もすでに担当役員を決めており、徐々にムードの高まりが感じられる。

昨年の「雪宝頂」は、第一回目ということもあって、やや学生部指導委員会の主導で進められたが、第二回目の本年は、学生主体でと考えている。今の学生たちもやればできるという感を強くしている。一昨年の学生部・プータンヒマラヤ登山隊で実証済みである。また、事故には十分留意しなければならぬが、少しは無鉄砲な面もある若者らしい登山を期待したい。

この交流が、近い将来における学生による「未知への山域」への一助になれば幸いである。会員諸氏のご支援、ご鞭撻をお願いしたい。

(文責・吉永英明)

ルートファイディング考・上

橋村一豊

ルートを見つける眼が確かでないならば、目的の山に登り夢を実現することができないし、安全な登山も期しがたい。ルートファイディング(以下RFと略す)は根源的な登山技術なのだが、従来登山界ではゆきとどいた論考がなされた形跡がなく、奥は深いが漠然たる分野として取り残されてきた。古今の山書を博捜してみたが、先人たちが残したものは後出の故・桑原武夫会員の紀行文を除いてほとんどなきに等しい。

私は、何とかRFを体系的な知識としてまとめることができないうかかと考えた。体系ができれば技能のポイントが掴め、従来よりも短時間で習得できる効果的な学習法が導き出されるはずである。

先例がないので、やり方は自分で考える他はない。いろいろと手探りで進みながら数年が過ぎ、折々の山行での所感、岳友たちとの意見交換などを通じて得た知見などを基に、先の見えないヤブコギをするような心境で、とりあえずまとめた論考が、山岳雑誌『岳人』本年三月号に載せた「ルートファイディングのすず

め」である。私はこれを書きながらも、書いた後も、論旨の不徹底さと明晰さの欠如を自覚している。いざ現場試行(フィールド・スタディ、以下FSと略す)などを交えて思考を練って続論を書き、補完したいと考えている。

山岳書に先例のないことを追究するのだから、範は山書以外に求めなければならぬ。そこで問題を考える上での古典的最高峰とされる、ルネ・デカルトの『方法序説(デイスクール・ド・ラ・メトード)』を参考にしては、と思いつき、試してみた。デカルトは言う。

一、明晰、判明に知覚できる事実を出発点とすること

二、諸々の難問のひとつひとつを、最小の部分にまで分割すること

三、その分割された小部分を、単純でわかりやすいものから複雑でわかりにくいものへと秩序立てて並べ替え、順を追って考えること

四、見落としがないと確信できるまで、広範囲にわたって全般に枚挙し、見直すこと

(「方法序説」第二部のこの文節はも

つと長いが、大意を要約した)

私が試みたのは、RFはどのような能力の複合(コンプレックス)によって成り立っているかという、三ページに掲げる表である。RFに使われる能力は、私の定義(ディフィニション)が不完全かもしれないが、表に書いたように大体20くらいある。1から7までは行動類型(パターン)であって、能力というに値しないから、8から20までの、13の能力といったほうがよいかもしれない。登山者の等級付け(クラシフィケーション)を四つに分け、上から虎クラス(精通者)、狼クラス(上級者)、狐クラス(中級者)、飼犬クラス(初級者)に四分割し、それぞれのクラスが持てる能力を総動員しなければならぬであろう山、または山での状況を、「主なフィールド」として記入した上で、1から20までの能力をクラス別に割り振ってみた。この表を見てみると、今までの経験から確信していたこと、あるいはおぼろげながらこうではあるまいかと思っていたことなどが整合性をもって、筋道を立てて考えることができるようになった。デカルトは、なるほど言われているとおり頼りになる導師である。

さてそういう作業仮説をやつているとき、永年の岳友、神部一男会員

(長岡技術大教授・経営学) から役に立つ入れ知恵をもらった。三月号『岳人』の私の所説を読んだといい、RFの奥義修得の困難を理解する上で、知識の二項対立(ダイコトミ)、形式知(エクスプリシット・ナレッジ)と暗黙知(タシット・ナレッジ)の取り扱いを知る必要があるという指摘である。彼は若い頃東京大学漕艇部で名キャプテンといわれた人で、東大には「漕法極意」という秘伝書(テキスト)が存在するという。しかしこれによって習得できる実技はほとんどゼロであり、実際のオールさばきは隅田川などに艇を漕ぎ出し、「女の尻を撫でるがごとく」など、知的な東大生には似つかわしくない下品だが、すぐ感じの掴める比喩(メタファ)を多発してFS(現場実習)をさせるのだという。

暗黙知に属する漕法の伝達は教える者と教わる者が体験を共有するFS以外に伝授法はなく、RFの狼クラスから上の技能も同じような暗黙知ではあるまいか、という。また、これを詳述した経営学の本(野中郁次郎、竹内弘高共著、梅本勝博訳『知識創造企業』一九九九年七月第十刷刊、東洋経済新報社)の一読をすすめてきた。この本は、企業経営における暗黙知と形式知の取り扱いを論じ、知識の創造によって競争優位

ルートファインディングの能力構成

知識のダイコトミー

主なフィールド

知識、技能、行動の特徴

暗黙知のレベル

暗黙知を形式知に移行させるレベル

形式知のレベル

無知のレベル

虎クラス 自分の目で道を開拓
狼クラス 作図と試行錯誤
狐クラス 読図
飼犬クラス 団体登山 百名山

- ・原始境、原生林
 - ・未踏地
 - ・廃道
 - ・予知不能な行程
 - ・山深く長いアプローチ
- ・自然地、二次林など不確かな道（未踏地を含む）
 - ・廃道化に向かう道
 - ・予知困難な行程
 - ・営業小屋、人工的補助、道標なしまたはごく少ない
 - ・アプローチが不便
- ・地図、磁石でほとんど予知できる山域
 - ・案内書で予知できる行程
 - ・本道を外れると指導標なし
 - ・営業小屋、人工的補助、指導標あり
 - ・登山口（下山口）への交通完備
- ・人の出盛るルート、山
 - ・整備された登山道
 - ・営業小屋、人工的補助
 - ・指導標過剰
 - ・山腹、時には頂上まで車道、ケーブル、リフト

20. 予測できない状況の中ですばやく最適のルートを見つけ、あるいは難所を強行突破
 19. 困難（可能）と危険（不可能）の見分けが正確
 18. 悪場を恐れない（対応する技術と装備の備えあり）
 17. 観察、偵察、推測に洞察を交えてRFをし、山のイメージを総合的に把握
16. このクラスの指導は言葉（座学）、文字（教本）では不可能。教師と生徒が体験を共有するFS以外に伝授法はない
 15. 上と下のポイント（FSと現地観察）という直接体験を、作図によって形式知に定着させる。また作図は読図の正確さを向上させる
 14. 現地観察を重視し、これに基づいて直観、カンを働かせRFをする。迷っても慌てず、原点に戻ってやり直す
 13. 事前に地形図、文献などから、登る山のイメージを思い浮かべ、それをルート図の形にまで具体化、要約化
12. 読図能力がRFのすべてだと思っている
 11. 地形図を見て浮かぶ山のイメージが貧困
 10. 地形と磁石でルートを見つけるが、それらが役立つ難所へ出ると行き詰まる
 9. 指導標のないルートへ迷い込むと慌てる
 8. コースタイム入り一般大衆向け地図などを頼りに計画を立てるが、主コース以外のルート研究不足
 7. FSによる教習経験がない（乏しい）
6. レシプロケーション（最安易なルートから三角点往復）
 5. 地物、自然に無関心（気持ちの余裕がなく無学）
 4. コースタイムをメドに歩く（条件の変化を考えない）
 3. 指導標を頼りに行く（施設頼み）
 2. 多くの人が行くほうへ行く（他人頼み）
 1. 先行者の後について歩く（リーダー頼み）

注) RF : route finding FS : field study (山地学習)
 ダイコトミー (dichotomy) : デカルトの二元論に由来する、西洋哲学での知識二分法
 René Descartes "Discours de le Méthode", 1637 (方法序説)

に立つ方策を論じたもので、目的は登山ではないが、論理の展開と実例による傍証はRFを考える上で参考になる。

形式知と暗黙知について、前掲書が述べるところを手短かに要約する。前者は文字(文書、マニュアル)数字(データ、数表)などの形式言語で表すことができる知識で理論化や原則の抽出が可能、伝達が容易である。西洋哲学の伝統においては主要な知識のあり方であり、今日でもそうである。しかしこれのみを偏重するところに欧米先進企業の弱点、限界があり、日本企業が行っていることと暗黙知をもっと活用しないと企業の活力は衰退するという。

他方、後者は形式言語では言い表すことの難しい知識で、人間一人ひとりの体験に根ざす個人的なもので、洞察、直観、勘、信念、ものの見方(パースペクティブ)、価値観、情念などの要素を含み、時には潜在意識にもぐつていることもある。西洋哲学に発源する思考法のなかでは軽視されてきたが、実は創造力の大半は暗黙知の中に潜んでいることが最近注目されるようになってきた。日本にはたとえば禅の修行などに見られるように師弟共同生活を通じて以心伝心で学びとられてゆく「心身一如」とか「主客一体」といった暗黙知の

とらえ方の長い伝統がある。

暗黙知(個人に属する)を、体験の共有、あるいはブレイン・ストーミングなどの合宿や頻繁な会合を通じて参加者の共同の暗黙知に転換しさらにそれを比喩(メタファ)、類似(アナロジー)、概念化(コンセプト)、仮説(ハイポセシス)、モデルなどの形をとりながら対話と共同思考によって、しだいに形式知に変



イラスト・村上直温

換してゆくプロセスが新知識を創出する。暗黙知(個)―暗黙知(共同)―形式知への変換。形式言語(文字や数値)によって、会社全体とか、企業グループ全体とかのマッスに伝達し浸透させることが可能な域にまでもつてゆく(この過程を「表出化」と称する)とき、知識が創造されたとする。この本は大変示唆に富むも

のだが、この辺で打ち切らないと、本論が進まない。

さて、狐クラスの能力でまかなえる範囲、つまり読図ができれば行ける山は、知のダイコトミーから見ればほとんどすべて形式知の分野である。読図技能の修得も、案内書による学習も、すべて独学でやれるだろう(数回の適切な座学を受ければ、より上達は早い)。狼クラスまで立ち入って作図をやれば、読図の要領や正確さはさらに向上する。しかし地形図を見ても役に立たないルート(たとえば沢や岩場や氷雪登攀や眺望皆無の密林など)、指導標皆無で踏み跡薄弱な山域へ行くとルートが見つけられず、道迷いをして遭難する危険もある。

全地形対応型(オールテレイン)、全天候型(オールウェザー)の山歩きをする力を得るにはやはり狼と虎クラスの修行が必要になるが、ここでの知識や技能はすべて暗黙知に属し、伝授が難しい。そこで鍵(キー)になるのが、一覧表の能力番号での14、15、16である。教える人と教わる人が体験を共有しながら暗黙知を移転し共同化してゆく。この体験には山行が一番重要だが、技能的に絞ったホンネの出やすい親密な対話も効果がある。都会のティールーム、酒を飲みながらなどもよいが、テン

トや山小屋でストーブを囲むなどして、一日の行動をふりかえり明日の行動を語るなどの団欒の折に、ポリクロニックな時間(スケジュールなどで分刻みに分断されない、ゆつたりと帯状に流れる時間系―E・T・ホール)のなかで思いつくままに語られる伝授は、砂漠にラクダの尿がしみ込むごとく、教わる人に吸収されやすい。

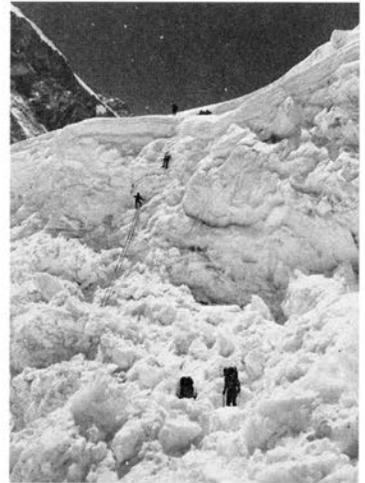
山行での伝授のポイントは(一)方向感覚をいつも把握しておくやり方、(二)山、谷、地形、岩質、氷雪、雪渓、植生などを観察する要領(山により重点が異なることがある)、(三)空間、遠近のスケールを早く掴むやり方、(四)現在地の、その山域全体における把握(心象地図⇨メンタルマップの形成)、(五)直観や洞察で分岐などでルートを選定した場合の基準となる、その前にやった演繹や帰納の内容(天の神からの靈感⇨インスピレーションでRFをやることなど、まずありえない)、(六)その他、である。

さてその後にくる最も重要なものは、作図である。作図によってRFの要点はより確かに、教わる人の頭や心に固着(ランディング)される。暗黙知の伝達に効果が大きい。作図を取り入れたRF実習山行は、そうでない場合に比べて、技能習得のスピードは三倍も速い。(以下七月号)

海外の山

熟年たちのエヴェレスト

江本嘉伸



エヴェレスト、ネパール側の難関、アイスフォール (撮影・江本嘉伸)

二〇〇〇年代最初のサミッターは、誰か？など、エヴェレストの周辺がこの春、格別に賑やかだ。さまざまな話題とともに、南北に五十数隊がひしめいている。

そんな中で、人間は六十歳になっても、どれくらい行動ができるだろうか、を考えさせる一連の動きがある。レフ・サルキーツフというグルジア国籍のアルメニア人熟年登山家のことが、そういう動きの中で何かと話題になっている。

サルキーツフは、一九九九年五月十二日、コーカサス・エヴェレスト登山隊のメンバーとしてエヴェレストに登頂したが、その瞬間わずか一日の差で、「世界最高峰最高齢登頂者」となった。それまでの最高齢記録はスペインのレイモン・ブランコが一九九三年に登頂した時の「六十歳百六十日」だったが、サルキーツフは

「六十歳百六十一日」だったのである。

サルキーツフは、旧ソ連の優れた登山家に与えられる「ユキヒョウ勲章」を受賞した有名な登山家で、七五年から九一年までコーカサス山岳会の登山指導員をつとめた。そのペテランにしても、エヴェレストの山頂への試みは特別だったらしい。「沢山の記録を読んだので、エベレストに不安はなかったが、六十歳という肉体が八八四メートルの高さでどう反応するものかわからなかった」と、サルキーツフは最近になって回想している。

エヴェレストのウェブサイトによれば、この春サルキーツフの記録に挑戦しているのは十三人いる。なんと最も多いのが日本人で「六人」、以下アメリカ三人、ロシア二人、スペイン、フランス各一人、という内訳だ。ただし、単に各登山隊員の年齢

をチェックしただけだろう。

日本からは三つの隊が北のチベットの側からチョモランマを目指している。北海道山岳連盟の「北海道エヴェレスト登山隊（江崎幸一隊長）、東北地区海外登山研究会の「東北海登研チョモランマ二〇〇〇登山隊（八嶋寛隊長）」、それに「法政大学チョモランマ登山隊二〇〇〇（中村敏夫隊長）」の三隊である。

どの隊も中高年が目立つが、とりわけ建学百二十周年を記念する法政大隊は、五十歳、六十歳台のシルバ一代が計画を引っ張っている点が目立つ。四月現在の年齢は、隊長の中村が六十歳七カ月、登攀隊長の山本俊雄が六十三歳九カ月、といった具合である。「今遠征の特徴は、六十歳以上のOBが最高年齢世界新記録また日本記録に挑戦すること」と計画書でもふれている。南峰まで登った「還暦のエヴェレスト」の宮原巍の例もある。本人の力に加え、天候とすぐれたシェルパに恵まれれば、あるいは……。

アメリカ人の一人は、シカゴの実業家、アル・ハンナである。年齢は、「まもなく七十歳」。国際登山隊の一人としての参加だが、これまで南極大陸最高峰のビンソン・マシーフはじめ六つの大陸の最高峰に登ってお

り、エヴェレストに登頂できれば、七大陸最高峰登頂者になる。初登頂からやがて半世紀、いまや「若いも若きも」エヴェレストに行く。ちなみに、「若き」では、十四歳のネパール少年を登らせる計画がある。

ところで、昨年はあのジョージ・マロリーが七十五年前に見つかるという大ニュースが飛びこんだが、今年に残るアンドルー・アヴィンとカメラの搜索を目的とする登山隊がエヴェレストに入っている。ニュージーランドの登山家、ラッセル・ブライスをリーダーとする英BBC隊で、昨年の搜索隊に参加したピーター・ファーストブルック、グラハム・ホイランドのBBCスタッフも中核メンバーとして参加している。九三年十月、自身エヴェレストに登頂しているホイランドは、マロリーたちが行方を絶つた一九二四年の遠征に参加し、マロリーにコダックのカメラを貸したハワード・サマヴェルの大甥だ。カメラさえ見つければ「登頂ミステリー」に決着がつく、との意気込みだが、はたしてどうなるか。

この会報が届く頃は、なんらかの結果が出ているだろう。「エヴェレスト二〇〇〇」の気になる成果と出来事については、後日報告したい。

報告

REPORT
5月

総務委員会

平成十一年度下期 第三十回新入会員 オリエンテーション開催

四月一日午後二時より、十一年度下期入会者(対象会員番号一三二五二～一三三〇二までの五十一名)のオリエンテーションが、本会ルーム会議室において開催された。

大塚会長、小倉・大森両副会長出席のもと、長野(信濃支部)、福島など遠距離からの参加者や、今回試みとして上期入会の欠席者にも再度の機会をお知らせするなどし、合わせて十九名が出席した。

総務担当西村理事の開会の挨拶で始まり、同じく総務の高原理事によるビデオ説明など会組織と活動全般にわたる紹介、および委員による山岳保険・上高地山研の案内などが行われた。

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

記念撮影をはさんで、大塚会長の「新入会員の皆さまへ」と題する講演では、「若き日の山の失敗」や「富士登山を体力診断の目安として年齢に応じた山登りを目指す今日」など体験に基づくアドバイス、あるいは「日本山岳会」が外国で高い評価を受けているという事例を通して会員としての自覚と誇りが保たれるようにとの示唆があった。

続いて総務顧問の神崎監事の歓迎スピーチや新入会員の自己紹介・質疑応答、および上期入会の発起人から「九十九年度同期会」への参加の呼びかけなどを経て、最後に恒例の懇親会が行われた。

新入会員の皆さんからも「自慢の酒・ワイン」を持ち寄っていただき、和やかな中にも活気にあふれた、いかにも「日本山岳会」らしい歓談の輪が広がり、午後六時半過ぎ、盛況裡に幕を閉じた。

(畠中 丘)



新入会員 オリエンテーション

図書委員会

第二十八回山岳史懇談会 同志社大学山岳部 七十年の歩み

二月十八日夕方、満員の参加者が本会ルームにあふれていた。同志社の創立は一八七五明治八年、大学山岳部は一九二九昭和四年に創立、今年で百二十五年と七十年を迎える。七十年史を編纂中であるが先にビデオができた、と大塚会長に伝えられ、本日公開されることとなった。

創部七十年の歩みを記念して「遠

い山 旅する心」と題したビデオ(五十五分)一卷にまとめ、別冊として同志社大学山岳会登山史年表―参考地図付三二ページA4判が配布され、講師の平林克敏氏から概略次のような話があった。

同志社では創立後しばらくして(二八八〇年頃から十年余)学生は近郊の山々、東山三十六峰などを盛んに歩くようになり、山河跋涉するのが慣習となっていた。(その頃の学生に河口慧海(二十一歳もいた)浦口文治はその健脚と英語力をかわれ、W・ウェストンの岳友として同行している。後に田部重治の知遇を得、JACにて「ウェストンと歩いた頃」と題して講演をしている(昭和九年十一月―山岳二九年三号掲載)。日本の近代アルピニズムの萌芽であろうと理解している。

戦後西北ネパールを目指して六〇(昭和三五)年五月、アピ(七一三二メートル)を登る。インド政府の特例で戦後初めてインナーラインを通過、ガルワールヒマラヤからわずか半日でネパール入りをした。前年の五九年三月、ダライラマはインドに亡命していたが影響は少なかった。山は難しく、遭難したイタリア隊生き残りのシェルバ、ギャルツェン・ノルブと一次登頂を行い、二次登頂も果たした。頂上で目前に見た西チ

ベツト・ナムナニ峰は登頂を夢見ながらも、その後二十五歳の歳月を必要とした。

六三(昭和三十三年)七月、翌年一月、西ネパール・サイパル(七〇四〇メートル)へ遠征。インド政府のインナーライン通過の許可を得て入山したが、共産中国のチベツト侵攻によりチベツトからの難民が増加。現地は混乱状態で足留め、ゲストハウスに軟禁状態となる。中央政府と交渉するがインナーライン通過は不可能となり、広い西ネパールを雨季のなか四十三日間キャラバンをして山麓に達した。大変難しい山で、急

峻な南尾根東壁を十月二十一日登頂。最近北面側から登った大阪の岳友から、「よく急な南面を上りましたね」と感心された。第二登は二十五年後に行われている。さらに登山終了後に二名が西北ネパール奥地を五六〇キロ踏破し、ポカラに出た。

六五(昭和四十一年)五月、アランダスアマゾン探検登山隊(AA計画)がビルカパンバ山群最高峰サルカントイ(六二七一メートル)を未登の北東稜から第三登、その後メリソスグループの登山とゴムボートによりビルカパンバ河を一三〇〇キロ下降する。当時としては画期的な

ことであつた。

翌六六(昭和四十一年)年にはアランダスのメンバーが中心となって若手OBと部員が集まり「八〇〇〇メートル会」という研究会を作り、K2やダウラギリ一峰の検討をはじめ、ヒマラヤのジャイアンツを単独で目標とするもので、七〇(昭和四十五年)八月、ポストモンスーンに西ネパールのダウラギリ一峰(八二七二メートル)遠征、十月二十日登頂、第二登であつた。これに先立つ三〇五月、平林はJAC隊に参加、エベレストに登頂している。

八一(昭和五十二年)年、中国に転進アピ頂上で見た西チベツト、ナムナニを希望したが中国では未知の山で話にならず、開放間もない四川省四姑娘山を目指す。峻険な岩峰で登れるのか、と思つたが、四〇五月偵察、七〇八月南東稜にルートをとる、隊長を除いた全員が登頂した。

八五(昭和六十年)年四〇七月、日中友好ナムナニ峰(納木那尼七六九四メートル)合同登山は、史占春総隊長、斎藤惇生前JAC会長、劉大義副総隊長、平林克敏登山隊長などの国家的大部隊で五月二十六日、初登頂に成功した。アピから二十五年、念願の山であつた。交渉期間中、NHKのシルクロード・黄河上流域テレビ放映に刺激された米國TVがこ

の地域を目標にしていた。京都学士山岳会も入山を希望していた。ナムナニは未踏峰であるので、日中合同国対国間の交渉原則がある。日本側はJACでの一本化も考慮したが、結局京大・同志社合同の日本隊として臨んだ。日中友好合同登山の最初であり、隊を一本化して隊長、副隊長などを選んだ。その後は中国と日本二本立てで並列となつている。

八八(昭和六十三年)年二〇四月、東部チベツトのカント峰(七〇五五メートル)登山、三月二十四、二十六の両日に登頂。登山終了後、カント山域を広く踏査する。この地域はインドとの係争の地で、現在は中国

第三回「秩父宮記念山岳賞」推薦受付中

秩父宮記念山岳賞審査委員会

本年度、三回目を迎える秩父宮記念山岳賞の推薦を左記の通り受け付けています。多数の推薦を期待しています。

一、表彰対象分野

イ、登山活動

ロ、山に関する文化活動

二、応募方法

従来の「本人の応募と推薦者の推薦」という形式から、「推薦者の業績提出による推薦」という形

式に変更されています。

三、受け付け締め切り

平成十二年七月三十一日

詳細については会報「山」平成十二年二月号で、竹内哲夫副会長

が「秩父宮記念山岳賞の見直しについて」と題して執筆しています

ので、ご参照ください。

四、問い合わせ先

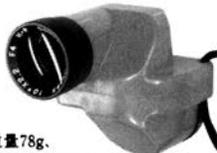
日本山岳会内・秩父宮記念山岳

賞事務局

賞事務局

コンパスグラス HB-3

広視界10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目標がそのまま正しい磁気方位です。



重量78g.

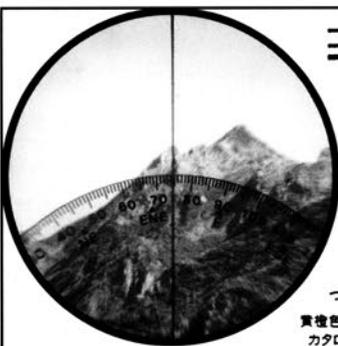
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600

貴金属メタリック ￥18,000 消費税別

カタログ代無料、電話、FAX、葉書でどうぞ

〒177 東京都練馬区上石神井1丁目37番13号

TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411



株式会社 石神井計器製作所

支配地とされている。インドのアツサムから撮った写真に魅せられたのだが、中国はそんな経緯からか許可を出し渋った。

九一(平成三)年三月六月、ソ連科学アカデミー極東支部と合同でカムチャツカ学術登山を行い、クルチエフスカヤ・ソプカ(四七五〇メートル)登頂。カムチャツカ半島を踏査、地質学、生態学的調査を行った。ちようどソ連が崩壊し、ロシアに移行中のときで、交渉はトラブリ、多くの部署に入山料を支払うことになった。現地は軍事基地であるがオーブンで、撮影はすべてOKであった。

同志社は初登攀、未踏、知られざるところ、日本人は初めての地を求めて歩いてきた。創部は七十年であるが、実質八十〜八十五年の活動であるろう、と結ばれた。ビデオはプロの編集で、音楽、説明が一体となつて効果をあげ、感動のうちに六十分は終わった。最後に大塚会長は、山岳史を映像化されたことを高く評価したいと述べた。(三沢一三)

海外連絡委員会

カナダ山岳会会長らが来日
アルバータ登山
記念行事を打ち合わせ

平成十二年三月十八日から二十四

日まで、カナダ山岳会会長マイク・モーターマー氏、同副会長ボブ・サンフォード氏、ジャスパライエロウヘッド山岳博物館館長ロリアン・パーリン氏が来日。大塚会長以下日本側実行委員会メンバーと本年夏に予定されているアルバータ登山他の記念行事につき細部の打ち合わせを行った。

登山を含む諸行事の予算案の確定、カナダ観光局・アルバータ州政府の貢献内容、同行するマスコミ関係者の参加条件などに関して有意義な討論が行われた。

中国登山協会
曾昭生主席の歓迎会

アジア山岳連盟理事国会議に出席するため来日中の中国登山協会、曾昭生主席を歓迎する日本山岳会による歓迎パーティーが四月十三日、水道橋の東京グリーンホテルにおいて行われた。大塚会長、小倉・竹内副会長をはじめ中国との関係浅からぬ面々が多数参加した。

昨年病床に臥したとうわさされた曾主席は元氣な姿を老朋友の前にあらわし、一九八〇年以來の中国登山協会と日本山岳会との交流二十年を回顧した。

まず井戸を掘った先人の功績が称えられるべきであるとの発言に出席

今年もさくらんぼで会いましょう

者一同うなずいたものであった。パーティーに先立ち、交流二十周年記念行事に関する打ち合わせ協議が行われた。

本年夏から秋にかけての学生交流登山、記念シンポジウムとして結実する予定である。

ネパール登山協会会長
タシ・ザンブー氏が本会に

四月十日、ネパール登山協会会長タシ・ザンブー・シエルパ氏が当会を訪問、大塚会長以下と会談した。

タシ・ザンブー・シエルパ氏は一九八八年の三国合同エベレスト登山隊チベットサイドでのネパール隊登攀隊長を務めたこともあつて多くの日本人岳人に知己をもつ。大塚会長とも旧知の仲である。

氏はボカラに建設中の国際山岳博物館建設募金活動に大きく貢献した日本山岳会に甚大なる敬意を表した。

(増山 茂)

赤シャツ土曜会

会則ができました

赤シャツ土曜会の会則ができました

た。会の目的を明文化して会員の増強を図ります。

一、名称

本会は赤シャツ土曜会と称する

二、目的

会員相互の親睦と赤シャツの普及、他グループとの交流を通じクラブライフの充実を図る

三、会員

日本山岳会会員で還暦以上の者と年齢に関係なく本会に入会を希望する者とする

四、会費

年二千円とし毎年一月末までに払い込むものとする

五、役員

本会には代表、総務、会計、各一名と幹事若干名を置く

六、定例行事

毎月第一土曜日と第四木曜日のルームにおける集会和、一月新年会、四月桃の花見山行、七月清里高原十月頃の一泊山行、その他会員提案行事とする

入会の申し込みはハガキに氏名、会員番号、住所を明記し、内藤勇宛(〒一五〇・〇〇二三 東京都渋谷区恵比寿二・一四・一五)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

北海道支部

創立三十周年に ルームができました！

「ルームがほしい」という声を何年も前から聞きましたが、バブルの崩壊・経済不況の北海道では「夢のまた夢」でした。

私は支部三十周年にあたって、J



北海道支部ルーム
新妻支部長と金井会員

待望のルームで新妻支部長（右）と金井会員

なく、JAC会員としての純粹な理想であり、苦勞された八十五年の人生観はJACのあべき姿にも触れて、私たちへの遺言となりました。その年の十二月十七日に私は札幌霊堂で弔辞を捧げ、

AC会員である金井哲夫氏（秀岳荘第二代社長）に相談しました。金井

五郎氏（金井テントから秀岳荘創業）は当支部の会計監事であり、年額五百円の頃の支部運営を北大前（札幌市北十二西三）の秀岳荘三階に連絡所を設置して、積極的にサポートしてくださいました。そして「新妻さん、屋上にイグルーを作ってください」といわれ、雪を集めて作成したイグルーのなかで「融けて春には消えてしまっても、全国的に珍しい北海道支部の雪のルームに乾杯！」と盛り上がった想い出があったからです。

平成五年四月十三日に、支部委員の井後幸太郎会員と北十三西三・アパート八〇六号の五郎氏を訪問したとき、熱心に「支部ユートピア構想」を話され、胸が熱くなりました。それは登山用具店のオヤジの立場では

「支部ユートピア構想」の継承を誓いました。

平成九年十月に秀岳荘白石店（本通一丁目南）がオープンしました。駐車場も広く、三階のテント展示フロアは好評で、そこに社長室があります。私は決心してドアをノックしたわけです。哲夫氏は昨年十月に厚意ある返信をくださり、七・五坪のスペースと壁の仕切り工事まで言及されました。十一月から工事に入り、山小屋のような二つの窓とドアができ、長谷川雄助事務局長を中心とした多くの会員の協力で、一月三日のオープンとなりました。

旭川の渋谷正己会員は、木彫りでJACの大きなロゴを作成してドアの上に掲示、「ルーム設置運営基金」とある会員有志からの募金で本棚を購入、家からソファや机なども運びこまれました。一昨年の東京での年次晩餐会の時の「各支部とっておきの一山」の横書き北海道支部名の看板を、私は大切に札幌に持ち帰りましたが、その横書き支部名にJACペナントを添えてルーム奥の最上段に飾りました。

多くの寄贈図書の種類や書類整理もしなければなりません。今年はルーム開設の準備期間とし、二十一世紀から図書目録を作成し、ルーム委員も選任して、などとうれしい夢は

膨らんでいます。

秀岳荘白石店は水曜日が定休日ですが、それ以外は十一時～二十時オープンで、ルームは三階の社長室の横です。ルームの鍵は事務室保管です。から、ご来札の折にはルームに立ち寄り、ルームノートにご記名ください。金井五郎氏の「支部ユートピア構想」の一部を継承された哲夫氏が、ミレニアム・スマイルで応接してくださいることでしよう。（そして小さな声で言いますが、ルームと同じ三階に八畳と六畳の和室があり、キッチン・冷蔵庫・トイレつきなのであります……）

（支部長・新妻 徹）

極東の辺境で山と温泉と花々を楽しむ

カムチャッカ半島

アバチャ山登頂 8日間

発着地 新潟・カムチャッカ直行便利用

出発日 07/22 07/29 08/5 08/12 08/19

¥298,000 ~ ¥346,000

運輸大臣登録一般旅行業490号/日本旅行業協会正会員

アルパコ ツアーズ サービス 株式会社

〒105-0003 港区西新橋1-12-1 (西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911
大阪 ☎06(6444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

東西南北



イラスト・宇都木慎一

日本山岳会発祥の場所が判明

百年史編纂委員会・南川金一

本会の創立は一九〇五(明治三十八)年十月十四日とされている。その日は、日本博物学同志会の支会という形で山岳会を発足させようという、山岳会設立についての最終的な打ち合わせが行われ、その時集まった七人が設立の発起人になった。

その時の場所について、発起人の一人、武田久吉は「飯田橋の駅の近所の川縁の富士見楼という三階造りの料亭があつて、その楼上で相談をした」(『山岳』第四四年第一号「日本山岳会の創立と小島烏水君」、あるいは「甲武鉄道の飯田町の停車場に近い飯田河岸という所に三階建の料亭がありまして、そこから富士山がよく見えるのです。富士見楼という名でした。その楼上に七人が集まつて最後の相談をして、それじゃあというのでいよいよ山岳会が結成さ

れたのです」(『山岳』第六一年「山岳会創立前後」) 六十年周年記念講演会での講演)と回想している。

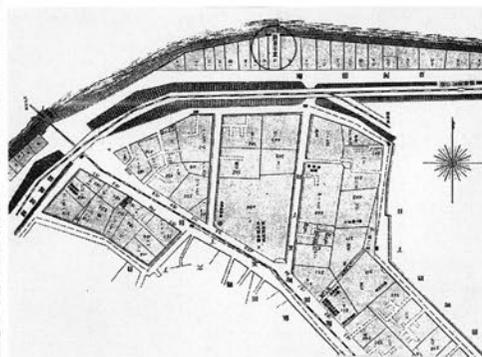
この山岳会発祥の場所といえる富士見楼がどこにあつたのかは、これまではずきりしていなかった。

そこで、千代田区立図書館に保管されている同区内の古い地図を調べてみたところ、旧麹町区の詳しい地図があり、それには公共的施設の他に主だった場所についての情報も記入されていて、飯田河岸一八番地のところに「富士見楼」と記載されているのが見つかった。

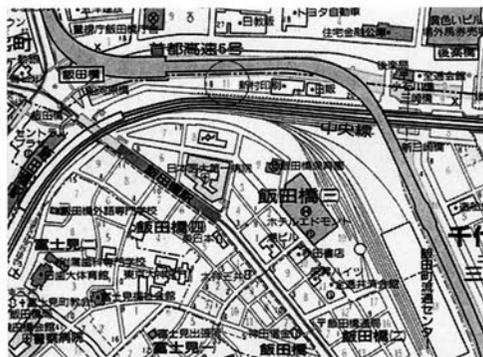
この地図は一九一二年(大正元年)のもので、記載内容が明治末の情報であること、飯田町停車場に近く、背後が神田川に面していること、そして何よりも所在地が飯田河岸であり、地図の「富士見楼」は武田の回想とびつたり一致する。

現在は、JR飯田橋駅から水道橋より一〇〇メートルほど、線路左手の、線路と神田川(上)を高速道路

が通っている)の間の三日月状の細長い土地の真ん中辺りになる。電車から見て、その辺りですぐに目に入る建物は「新村印刷」であるが、その二、三軒飯田橋より、千代田区飯田町三丁目一一番地辺りである。



1912年の地図



現在の飯田橋周辺

なお、早期の「山岳」には、もうひとつ「富士見軒」という名前が登場する。麹町区富士見町の富士見軒で有志晩餐会が開かれた、とある。富士見町も飯田橋界隈であることから、富士見軒と富士見楼は同一の場所なのではないかとの推測もなされてきた。これについても、前記の地図の富士見町一丁目二九番地に「富士見軒」とあるのが見つかった。その場所は、靖国通りを挟んで靖国神社の反対側で、現在の九段南二丁目五番地辺りである。

富士見楼といい、富士見軒といい、会合の場所の選定ひとつにおいても、草創期の会員の山に寄せるフィーバーがうかがえる。

《注》右が一九一二年の地図。南の上に描かれているので、左の現在の地図との対比上、上下を逆に掲載した。甲武鉄道と交差しているのは東京市電。左の地図の○印が富士見楼があつた辺り。

「彷徨の歌」その後

中村純二

事の発端は、昭和四十二年日本山岳会編の「山日記」に、「そんなにお前はなぜ嘆く」の歌が「彷徨の歌」京都大学山岳部部歌、作者不詳と発

表された点にある。

当時会員の何人かは、この歌の歌詞はW・シユミットボンの戯曲「街の子」の幕開けに歌われるもので、森歐外が訳したものであることを知っていた。このため山岳会の中で楽しい論議が起ることになった。「山」四七〇号八年八月・早乙女緩次、「山」六一八号九六年十一月・宮下啓三、「山」六二四号九七年五月・中村純二。その結果、「流浪の歌」は大正十二年頃、旧制第一高等学校旅行部で、森歐外の訳詩に誰かが採譜ないし作曲を行って成立したことが確かめられた状態にあるといえる。

この件については故田口二郎副会長も大変関心をもたれ、東大山の会の竹内進会員や小生にも、よく調べるよう要望されたので、今回はその調査の概要を報告したい。

竹内氏は「流浪の歌」が幕開けに出てくる演劇「ちまたの子」が、大正時代、日本各地で上演された点に着目、初期上演記録を調べた。詳細は近刊東大スキー山岳部七十五周年誌に譲るが、第一回上演は大正元年十月、土曜劇場第五回公演と銘打ち、毎土曜日、四回にわたり有楽座で行われた。舞台監督小山内薫。配役は、老父・稲富寛、ハンス・諸口十九、ゲルトルート（ハンスの妻）・葛城

文子、ゾフィー・酒井よね子、他に衆人、浮浪者、書生など。場所はバイエルンの山村。ただし幕開けに「流浪の歌」が歌われたのか、朗読されたのか、省略されたのか、その辺の事情はまったく不明である。以下の上演でも同じ。

第二回上演。大正四年五月、第三次新劇時代協会第一回公演。於神田三崎座。老父・青山杉作、ハンス・村田実、ゲルトルート・渡瀬淳子。

第三回公演。大正十年二月、新文芸協会第二回公演、於有楽座。老父・加藤精一、ハンス・横川唯治、ゲルトルート・加藤光子、ゾフィー・桜井八重子。

第四回公演。大正十年六月十三、十四日。京都生命座公演、於京都岡崎公会堂。当時美人女優と騒がれた入江たか子がゲルトルート役で初舞台。第五回公演。大正十三年三月、舞台協会第二十回公演、於神田錦町新声座。老父・土田純、ハンス・山田隆哉、ゲルトルート・岡田嘉子、ゾフィー・六條波子。

竹内氏は人気が高かった入江たか子が出演したことにより、「流浪の歌」が関西地区に浸透し始めたのではないかと考え、高島法男会員を通じて京都一中、三高、京大各山岳部の歌を調べることになった。高島氏によれば、昭和十五年頃、

京大でも京都一中でもこの歌は三高山岳部部歌と呼ばれていた由である。梅棹忠夫、川喜田二郎会員らによれば、その頃三高で覚え、釣りの連中の歌とか慶応の歌とか言われた由であるが、そのような確かな証拠はなく、三高から京大に持ち込まれたことは明らかであるようだ。

その三高では、同窓会が「三高歌集」なるものを時々発刊している。昭和四年刊のものには山岳部関係の歌として「雪よ岩よ」の一曲だけしか載っていないが、昭和二十七年刊のものには山岳部歌として「雪よ岩よ」と「そんなに前はなせ嘆く」の二曲が収録されている。このことから三高や京大で「流浪の歌」が歌われたのは少なくとも昭和四年以降であることがはっきりしてきた。この頃から竹内氏と私は緊密に連絡を取り合い、彼は演劇研究所や図書館を訪ね歩き、大正期の公演で「流浪の歌」がどんな扱いを受けていたか追求しようとしたが、九六年十二月、悪性リンパ腫のため急逝された。心からご冥福をお祈り申し上げる次第である。

ここで、大正十二年頃一高で歌われていた曲・図1と、昭和二十七年頃三高で歌われていた曲・図2、および昭和二十九年、戸野、朝倉による「山で歌う唄1」の曲・図3を並

べて掲げ、比較を行ってみたい。

まず歌詞であるが、森歐外の訳詩どおりである図1に対し、図3の現行では一番三行目の「わしが」↓「わたしの」、「お聞きやれ」↓「お聞きあれ」となっている。二番でも一行目の「気を安く」↓「気をはらせ」、二行目の「見て居やれ」↓「見て居あれ」と変わってきている。これに対し図2では「わしが」↓「わしの」、他は図1と同じでまさに図1から図3に移行の中間に位置する。

次に図1と図3はト長調であるのに対し、図2はヘ長調で音が少し低い。山の歌は口移しに伝えられることが多く、このような変化や微妙なリズムの平板化はよく起こることである。ただし図2の印刷には明らかにミス・プリントが認められたので、次の修正を行ったことをお断りしておく。図2の譜面中、第一行第三小節、第二行第一小節、ならびに第四行第三小節の各「下第二間」四分音符を、「下第一線」に上げ、第五行第一小節の「第四線」四分音符を「第三間」に下げた。

第三の相違点は一番と二番をそれぞれ最終の二つの小節に見られる。すなわち、図2の四行目の第三・第四小節は、図3四行目の第三・第四小節によく似ているのに対し、図2

図3 彷徨の唄



図2 山岳部の歌



図1 彷徨の歌



五行目の第一、第二小節は、図1四行目の第三、第四小節によく似ている。この点からも図2はまさに図1と図3をつなぐ位置にあると言える。

第四の相違点は図1と図2では二行目が四小節であるに対し、図3では五小節になっている点である。この変更は昭和二十一年頃、東大の山のルームで変更好きの雨宮淳三あたりがやりだした記憶もないではないが、記録がないので何とも言えない。どんなことでも記録に止めることの大切さをますます反省しているこの頃である。図3ではさらに二部合唱となり美しい曲になっている。まさに山の歌の変遷からも、山岳史や世相などがうかがえそうな気配である。

その後九二年三月、北大山岳部で発行された歌集『山の四季』では、「彷徨の歌」の編曲者が矢吹保となっており、へ長調。図2に比べて三行目と四行目が多少装飾的になっている。広島大学山岳部では立派な四部合唱の「彷徨の歌」が編曲され、東海地方あたりでも盛んに歌われているようである。誠に喜ばしい話であると思う。

歌の解明を要請された田口先輩も九八年九月、慢性腎不全のため亡くなられた。その年の八月、故竹内氏と私の原稿をお届けしたところ、早速長い電話がきて、「なかなか面白

かった、これですっきりしたよ」とたいそう満悦だった。このことはせめてもの慰めであったと考え、ご冥福を祈っている次第である。

田口二郎氏の『山の生涯』とアイガーヴァントをめぐる・3

近藤 等

■グリンデルワルト、二十世紀前半と後半

第二次大戦直前、田口さんによればグリンデルワルトはイギリス人の観光客で沸き返り、彼らは国の習慣をそのまま持ち込み、夜になるとデイナー・ジャケットに黒タイの男たちとロングドレスの女たちがロンドンの夜会に向かうように所狭しと歩いて、スイスの観光地を陽気に占領していたから、アイガーヴァントを指してドイツからやってくる連中は別世界からきた陰気な人種に見られたそうだが、現在では想像もつかない光景だ。あの当時、アルプスのリゾートはどこでも《ベル・エポック》の時代だったのだろう。グリンデルワルトに限らず、とくに冬のサン・モリッツなどはイギリスの紳士淑女たちの社交場で、スイス観光業の最上客だった。フランスのシャモニでもそうだった。

「今なおそうであるイギリス人」と田口さんは書いておられるが、私が見聞した今世紀後半のスイス、フランス、イタリア、オーストリア、ドイツのアルペン諸国のリゾート（私自身、グリンデルワルトは一九六二年以来、登山とスキーのため十数回訪れている）では夏冬を問わず、まったく状況は変わり、客種も大きく変わった。

デイナー・ジャケットやロングドレスの気取ったハイソサエティが見かけられるのは冬のサン・モリッツの五つ星ホテルのガラ・デイナーのパーティのときぐらいで、どこのリゾートでもラフなスタイルが主流だ。とはいっても最近では日本の団体客も利用するようになった四つ星以上のホテルの夕食にTシャツ、Gパンにスニーカーの日本女性が見かけられるのは場違いで感心できない。

登山そのものも大衆化した。ウールのシャツにネクタイ、ツイードの上着を着込んでアルプスを登っていたイギリスのハイクラスの人たち（ガイドも客を見習って同じ窮屈な服装で客をリードしていた）とはがらりと変わった。信じられないと思う人も多いだろうが、少なくとも七〇年代から八〇年代後半にかけて一番柄が悪かったのはイギリスの若いクライマー連中で、シャモニのスポ

ーツ店などでは彼らがやってくる店員たちは警戒した。ピトン、カラピナなどの小物類をくすねる事件が多発したからだ。

いずれにしても、ここ三十年間のアルプスの大半のリゾートの最上客は懐の豊かなドイツ人だった。イギリス人は国から遠い。隣国のフランス人やイタリヤ人は物価が自国よりずっと高いから、またオーストリア人は隣国だが、風景がそっくりだからやってこない。グリーンデルワルト観光局の統計でもっとも多い観光客はドイツ人だった。ただ数年前からは二位だった日本人団体客がドイツを越して一位になりつつある。日本人ツールの宿泊日数は相変わらず少ないが、高級ホテルが好きたし、ユングフラウヨッホ観光を目的に四季を問わず大勢訪れるので歓迎されている。

日本からの登山者はどうかというところ、ユウグフラウとメンヒの一般ルート、それにアイガー東山稜を登る人が増加している。壁全体で現在十五本ほどのルートがあるアイガーヴァントは日本人に限らず、ほとんど登られていない。昨夏、平山越子嬢は篠原達郎、長野岳史、岩立実勇とコンディションの悪い壁で四日間苦闘してアイガーヴァントのクラシックルートを完登した。日本の女性とし

ては最初のクライムのはずである。付記

アイガーヴァント・クロニクル
初登 一九三八年七月二十一〜二十四日。アンデル・ヘックマイヤー、

ルードヴィヒ・フェルク、ハインリッヒ・ハラ、フィリッポ・カスバレク(一九五四年六月六日、ペルー・アンデス、サルカントアイで墜死)。

第二登 一九四七年七月十四〜十六日。リオネル・トレイ、ルイ・ラシュナル。

冬期初登 一九六一年三月。T・ヒーペラーをリーダーとするドイツ・オーストリア隊。

単独初登 一九六三年八月。ミセル・ダーブレイ、タイム八時間〇七分。

日本人初登 一九六五年夏。高田光政、パートナーの渡部恒明は墜死。ダイレクト・ルート初登 一九六六年二月二十四日〜三月二十五日。

イギリス・ドイツ隊。リーダーのJ・ハーリンは墜死。彼を記念してハーリン・ダイレクト・ルートの名がつく。

ハーリン・ダイレクト冬期第二登

一九七〇年二月七日〜三月十八日。遠藤二郎をリーダーとする山学同志会隊。メンバーの星野隆男は翌年グラント・ジョラス北壁冬期第

三登に成功し、いわゆるアルプス三北壁冬期最初の完登者となる。ジャパン・ダイレクト・ルート

一九七〇年七月。加藤滝男をリーダーとするJ・E・C・C隊、ローテ・フルを経由するダイレクト・ルートを開拓。「この登攀の成功は日本のアルピニズムが到達している成熟度を示す快挙である」(フランスの日刊紙「ル・モンド」へのガストン・レビュファの寄稿から)

一九七〇年まで、トニー・ヒーペラーによればアイガーヴァントは九十六登された。死者は三十九名。その後は多数のパーティが登っているので登攀数は不明。三百登ほどだろう。

冬期単独初登 一九七八年冬。三ビバーク四日間。長谷川恒男。

三北壁連続単独冬期初登 一九八六年冬。所要タイム、アイガーヴァント十時間。クリストフ・プロフィ。これに先立ち、プロフィはグラント・ジョラス、マッターホルンの各北壁を登り、全体の所要タイムはわずか四十時間五十四分。山頂からの下降はパラグライダー、移動はヘリを使用。

冬期女子単独初登 一九九二年三月九日、カトリス・デステイヴェル。所要タイム十七時間。スタート午

前五時三十分、十九時に《最後のクラック》にフレンズをかけ、ヘッドランプをつけて登り、二十二時三十分登頂。ビバーク用具を携行して待っていたジェフ・ローに迎えられる。全コース中アイゼン着用。

アイガーヴァントに先立ち、フリー・クライマーとして頭角をあらわしていたデステイヴェルは一九九〇年夏、かつてあのボナチが一九五五年夏に六日ばかりで初登したドリユ南西岩稜をわずか四時間二十分のフリー・クライムで完登している。しかしボナチを尊敬する彼女はボナチの初登攀がいかに困難なものであったかを示す意味もあって、この翌年ボナチ稜の左に位置する南西壁にA4を含む新ルートを九回のピバークで単独で開拓した。

なお彼女はアイガーヴァントの翌一九九三年、グラント・ジョラス北壁ウォーカー・バットレスを冬期女子単独初登に成功。スタート二月八日八時十五分、登頂十日十八時三十分。さらに翌一九九四年にはマッターホルン北壁、ボナチ・ダイレクト・ルートの冬期単独第二登にも成功している。

プロフィとデステイヴェルのクライムは現在最高水準の男女クライマーが到達したレベルを明示している。

図書紹介



尾瀬総合学術調査団・編

『尾瀬の総合研究』

一九九四〜九七年に至る山、尾瀬ヶ原地域を動植物生態学、地形・地質・地理学、地球化学などの面から総合的に調査した学術論文集であり、ページ数約八五〇、収録されている論文数五〇報、執筆者総数約九十名の大冊である。

戦後、年々増加する入山者による影響から、この広大な高層湿原を含む脆弱な地域を守るために、さまざまな保護施策が行われてきた。適切な維持・管理の方策を考えるためには、この地域の全体像とその変遷を科学的に理解する必要があるとして、関係三県及び環境庁、文化庁の支援

で一九五〇〜五二年の第一回、一九七七〜九七年の第二回に続いて行われたもので、過去約五十年間の池塘や湿原の富栄養化や自然環境の変遷の様子が解明されつつある。植生の変遷、泥炭土壌の性質、そこでの嫌気性窒素固定やメタン発酵活動、池塘のプランクトン相、地下水位の変動と森林相の関係、約六千年前に今日に近い湿原景観が現れる過程、至仏山の岩屑地の斜面形成過程、至仏・燧ヶ岳のハイマツ分布など、興味をそそる内容である。(織方郁映)

一九九九年三月 尾瀬総合学術調査団発行 八六八ページ 八千円

神長幹雄・著

『運命の雪稜』

―高峰に逝った友へのレクイエム―

ここ十年ほど、『山と溪谷』誌に著者が執筆した、遭難に関する記事を集めて一冊にまとめた本である。

八章からなる遭難記事の各章末には事故のその後や遺族の方々に取材して、遺稿集や著書などから、新たに書き下ろしがつけ加えられた。最終章では、本多勝一氏と著者が、それぞれの遭難のケースをもとにヒマラヤでの遭難をふりかえっている。

ヒマラヤはより先鋭化された登山と、もうひとつのより大衆化・観光

化への流れの二極化時代に入って、遭難もまたますます二極分化していくのではないかという。遭難に学ぶことも多いが、まさに運命としか言い様のないような、壮絶な戦いの中に逝った人、そして残された人々の思いに心揺さぶられ、胸が痛む。遭難とは非情なものである。

友へのレクイエムとして描いた著者の心情が読む側にも伝わってくる文章である。(渡邊玉枝)

二〇〇〇年一月 山と溪谷社発行
二八五ページ 千五百円

木暮理太郎・著

『山の憶ひ』上・下巻

このほど本会の大先輩、木暮理太郎の『山の憶ひ』(上・下巻、昭和十四年、龍星閣)が平凡社ライブラリーに加えられ、新装出版された。

本書は、山岳書のなかでも名著とされていることから、過去にもいくどか復刊出版されている(福村書店、日本芸芸社、大修館書店の各版、その他山岳全集収録の如し)。しかしそのいずれも内容の膨大さもあってか重厚な造本になり、もう少しハンディなもの望まれてきたところである。戦後山岳名著の文庫本化が相次ぐなかで、本書は早くからそれが待望されながら実現しなかったもの

である。今回、本書がハンディな新版で復刊されたことは画期的なことであり、また大先輩の名著を手元において手軽に読めるようになったことは、会員にとっても誠にありがたいことである。

内容については改めて紹介の要もないが、ひとつだけ付言すれば、著者はまだ日本の山々に信仰登山の色彩が残り、探検登山が行われている時代に、わらじ脚絆で先駆的な登山を实践したおそろく最後の人であったろうということである。このあと榎有恒氏らによる近代登山の導入によって、また学校山岳部の台頭で、日本の山々は近代アルピニズムの洗礼を受けていくのである。

本書の内容となつて地誌、考証、紀行などに盛られている木暮の山に対する接し方、考え方、また山の登り方は、登山の原点に触れるものとして、今日なお私たちに多くの教訓を与えつつけてくれるのである。今回の新版は上・下巻合わせて優に一〇〇〇ページを超える分量であるが、文庫版的なハンディな造本に加えて、原著に見られる木暮独特の精確な表現スタイルも、新漢字体、新仮名遣いに改められ、大変読みやすくなっている。また巻末の浅野孝一、横山厚夫両氏による丁寧な年譜、大森久雄氏の行き届いた解説は、木

暮理太郎と本書の理解に欠かせない役割を果たしている。山に登る者は常に座右に置いて親しみ、読み続けてほしい著作である。(松家 晋) 一九九九年六月、七月 平凡社発行 各千五百円

大久保昭次・著

『ぶらり・山と花のひとり旅』

山国で育った著者は、子どもの頃から山になじみ、当然のように好きになり、近くの低山を歩いてきた。そのことが後の百名山完登につながる。本格的な山登りのきっかけは、五十歳を過ぎた頃の腰痛を治したいと一念から仕事の合間に登った山が百名山で五十あつたと定年時に気がつき、残りを五年で完登しよう、あるときは一山行で東北の山十座を踏破したりして成し遂げた。現在も数々の山に登り、美しい花の写真と記録を残している。不思議なことに、腰痛はいつのまにか治ったそうである。さて「ひとり旅」とはぶらりのときもあるが、氏の記述にある通り遭難寸前になったり、厳しい条件のもとで、思いがけず可憐な花たちに出会い、心慰められるひと時もある。また、同行の登山者や土地の人々の語りなど、未知の人との遭遇など楽しいものもある。

こんな過去の山行のなかから選んだものを百にまとめ上げているが、花に寄せる著者の優しい気持ちが出ていて女性向きの一冊であろう。とにかく非常に詳しい。この山名、この花にはこんないわれがあったのかと改めて知る次第である。

著者は現在七十歳を超えておられるが、まだまだ気力、体力もあり人知れずの山を探し、これからは本当のぶらり旅に出かけるのではないか。(飯島絢子) 二〇〇〇年三月 (株)近代文芸社発行 三一八ページ 千八百円

筒井迪夫・著

『森への憧憬』

― 第一集・心に残る ―

― ドイツの林学者たち ―

東京大学の名誉教授である著者は、長い指導経験から林学に関する時代の変遷をたどる。明治以来日本の林野行政はドイツの影響を強く受けてきている。とくに美林とは何かと問われれば、より経済的採算の取れる針葉樹を中心とした植林としてきた。しかし著者は、ドイツの林学者の中にH・コッタなど、林野の自然景観とのバランスを提唱していた林学者に共鳴、森林が人間の心の潤いにとっていかに大切であるか、近年の自

然思考に合致することを見出す。

ハイキングを通して森林に入り込む機会の多い岳人にとって、人間と森林との関わり合いを知る上で参考になる。とくに専門書としての参考文献を調べるには便利であろう。(林 栄二) 二〇〇〇年一月 林野弘済会発行 一一四ページ 千百円

内田嘉弘・著

『大和まほろばの山旅』

著者の地元に近い奈良盆地をめぐる青垣の山々を五地域に分け、五十六座が紹介、ガイドされている。

ほとんどが里山といつてよく、最も高い山が高見山、一二四八・三メートル、五〇〇メートルから八〇〇メートルの山々が中心で、天の香具山一五二メートルも含まれている。「山高きが故に尊からず」で、この地域の山々は、記紀、万葉の舞台でもあり、歴史的伝承や事跡が詰まっている。これらの事柄を山の案内の後に、文献、環境庁や自治体の案内板、新聞記事まで広く取り上げ記している。各山に添えられているスケッチとともに、読む人、登る人を楽しませてくれよう。(相木宏信) 二〇〇〇年二月 ナカニシヤ出版 発行 二一七ページ 二千円

●新ハイキング選書●

藤井寿夫著

中央線の山を歩く

A5判・286頁・定価1680円(税込)

中央線の山を歩いて50年、中央線の山107座の紀行と案内。朝立ち、日帰りの範囲内、あまり登山者の歩かれていない山に重点を置いている。読物としても楽しい。最新刊 増刊出来

●深田クラブ編●

深田久弥の研究

読み、歩き、書いた

飯島斉 高澤光雄 高辻謙輔 深田クラブ編集部 共著

A5判・387頁・定価1680円(税込)

深田久弥の研究に造詣の深い三氏が、深田クラブ会報に、永年にわたり発表された成果をまとめたもの。深田久弥はこの一冊で全貌を顕す。

新ハイキング社 東京都北区滝野川7-6-13 電話・FAX 03(3915)8110

会務報告

三月理事会

日時 三月八日 十八時三十分〜二十一時

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 大塚会長、小倉、大森各副会長、西村、村井(龍)、森、宮崎、高原、勝山、村井(葵)、高遠、宮下、鯉坂、増山、坂井、河西、坂本各理事、中村監事、平山、中川、田邊、吉永各常任評議員

〔委任〕 竹内副会長、松原理事、神崎監事、平野常任評議員

〔審議事項〕

- 一、平成十二年度事業計画案(西村) 別紙資料により提案され、一部担当理事より訂正、追加がなされ承認
 - 二、平成十二年度収支予算案(村井) 別紙資料により提案された。承認
- なお、一、二号議案の議事録の文部省提出にあたり、署名人は宮崎、高原とする。 承認
- 三、ホームページなどに関わる問題点と対応策(森)
- 検討会(世話役・森)による最終報告(別添え資料)が提案された。問題点ⅡJACの案内など広報的役割のうち、ホームページ作成、更新インターネットを通じての問い合わせへの対応に、責任体制が明確でな

く、担当者の自主判断にゆだねられている。インターネットの利点である即応性が十分に活かされていない。対応策Ⅱ現在対応している資料委員会・データバンク研究会からインターネット小委員会(総務委員会内の一小委員会)とし、総務担当理事一名Ⅱ高原が担当)を設置し役割を移行。委員会はデータバンク研究会のメンバーを主に新たに編成する。

承認

その他の意見として●東海、信濃両支部でもホームページ作成の動きがあるので連携を取りながら進めるのがよい。●将来的には広報委員会とし、人員も補強したい。

四、アルパータ峰登攀メンバー選考

(大森副会長)

アルパータ・プロジェクト実行委員会は日本側登攀メンバーに、熊崎和宏(登攀リーダー)、森上和哲、竹内洋岳を提案、BCマネージャーは現在選考中である。

承認

五、重複本の寄託(西村)

北海道支部より重複本の寄託願(別添え資料)があった。

承認

六、「山岳」「山」の残品処理(村井龍) 財務委員会、図書管理小委員会、在庫チェックの上、支部、新入会員など希望者に配布処分したい。承認

七、田淵行男記念館より当会所蔵資料の事前調査願(鯉坂)

田淵行男記念館は今年、開館十周年を記念して特別展「百楽の山 常念岳―写真でたどる自然と歴史―」を開催予定であり、当会所蔵の資料の事前調査依頼があった。 承認

八、後援名義使用許可願(西村)

植村記念財団より「エベレストに立つ」登頂三十周年記念展示会への後援名義使用許可願。

承認

現在「Branch」だが「Section」のほうが当会に適しているとの指摘があり見直しを提案。大いに議論されたが他の「理事」などの英文表記も合わせ、今までの経緯、法的なものを加味した上での継続審議とする。

〔報告事項〕

一、晩餐会併催の西暦二〇〇〇年記念「山岳写真展」の準備(西村)

推進組織として「山岳写真展実行委員会」(委員長・羽田栄治、副委員長・川島新太郎、事務局長・遠藤源太、委員・堀嘉代子、石光久仁子)を設置。フィルムビデオ、総務両委員会をサポートし、「山」三月号で

広報。

二、日中友好登山二十周年記念事業について(宮崎)

日中友好学生登山の二年目を日中友好二十周年記念事業と位置付け、二つの行事を軸に行いたい。①中国より役員五、六人を招き記念シンポ

ジウム、レセプション、②日中学生を中心とした日本の北アルプスなどへの登山。中国側の意思を確認しながら進めたい。日中友好登山二十周年記念事業検討メンバー(橋本清、西村政晃、村井龍一、坂井広志、増山茂)で案をまとめ、理事会に諮る。

三、エベレスト登頂記念行事(西村) 三十周年(一九七〇)、二十周年(一九八〇)、一九八八年の三国合同も合わせて記念行事(映画会、講演会など)を実施したい。晩餐会当日

同じ会場を考えているが、具体的には、関係者数名の意見を聞き、実施組織、内容概要を決めたい。

四、委員会報告

総務委員会・西村、高原

①アンケートは一九七二、一九八三、一九八九年と過去三回実施したが、十年経過したので今年実施したい。予算はその他事業費として計上。

②二月二十六、二十七日、全国支部事務局会議を水道橋グリーンホテル、当会会議室で開催。初日は大塚会長の記念講演「一切所に臨んで」の後「支部活動の活性化を考える」をテーマに岐阜、山陰、宮崎の三支部の基調講演があり、活発な討論がなされた。二日目は当会会議室で事務連絡。

財務委員会・村井(龍)

全国の山岳博物館をご紹介します

資料委員会では「全国山岳博物館連絡会議」を毎年秋に開催し、

各博物館所有資料の収集、保管管理、相互寄託、

展示方法などの情報交換ネットワーク化を目指しています。

第1回を平成9年10月24日、上高地・山研を会場として、8館の参加により発足。第2回は10年10月31日、山岳会のルームにて、

第3回は11年10月31日、東京都写真博物館を会場として、

13館の参加へと発展してきました。

各博物館の概要を順次紹介させていただきます。

山岳博物館散歩・1

開館10周年を迎える 田淵行男記念館



田淵行男記念館は、1990 (平成2)年7月7日、信州・安曇野のほぼ中央に位置する豊科町に開館した。

わが国を代表する山岳写真家として、また高山蝶などの研究者として活躍した田淵行男の撮影や観察のフィールド、北アルプス・常念山脈をバックに建てられたこの記念館は、周囲をワサビ田に囲まれ、山小屋風のしゃれたたたずまいで、多くの田淵ファン、登山者、写真愛好家たち

に親しまれている。

今年当館は、開館10周年を迎える。「百楽の山 常念岳—写真でたどる自然と歴史—」と銘打った特別展 (会期7月7日～9月24日)、田淵の業績を後世に残すと同時に、山岳写真、自然写真分野の発展のため、新人の発掘を目的とした「田淵行男賞」の写真作品公募 (募集期間：7月7日～平成13年2月28日) などさまざまな事業を予定している。(田淵行男記念館学芸員・財津達弥)

田淵行男記念館

〒399-8201 長野県南安曇郡豊科町大字南穂高5078-2

TEL・0263-72-9964

休館日 月曜日 (祝日の場合はその翌日)、祝日の翌日

8月中は無休開館

交通 JR大糸線柏矢町駅より徒歩20分 豊科駅、穂高駅よりタクシー約5分 長野自動車道豊科インターチェンジより車で5分

- ① 今月の会計報告
 - ② JACグッズの在庫品棚卸。古くなったタイムピンは処分する。
 - ③ 各委員会へ、仮払いは内訳を、講師謝礼は領収書を添付する。
- 会報委員会・村井 (葵)
- 「山」三月号は科学委員会のフォーラム「登山用具の選び方、使い方」

を巻頭で掲載する。

海外連絡委員会・増山

AJ編集長クリスチャン・ベックウイズ氏が二月十三日来日、二十一日まで滞在。本部、京都、広島両支部にも出向き精力的に交流。三十一歳の彼から得るものが大であった。

自然保護委員会・河西

- ① 高尾山周辺に当会の「森をつくる」話を林野庁と詰めている。
 - その他
 - ② 四月八日開催の山梨支部総会に小倉副会長が出席の予定。
 - ③ 大塚会長より山本理事辞任の報告
- 二月二十八日付で一身上の都合による退任届が提出され、受理。

日帰りからキリマンジャロ、マッターホルンまで

全国ネットの山旅専門店!
安全で快適な山旅を。中・高年
からお一人様までサポートしま
す。各コース経験豊富なツアー
リーダー同行で安心。
おすすめポイント! 7日間手配OK
人気山旅スタイル。気軽にお問合せください。

2000年度カタログ
国内246コース、海外111
コース、自然に学ぶ旅36コ
ースの総合カタログ(全134
ページ)をお送ります。
各地発着それぞれのカタログ
をご用意しました。送付無料。

アミューストラベル株式会社
〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-22-2 新宿サンエービルB1
☎03(5325)1256 FAX03(5325)1258
大 阪06(6456)3366 名古屋052(588)5617 福岡092(414)5566
広 島082(502)2525 北海道アイダイヤル0120(802)514(東京へ転送)

- 本人より理事会において辞任の挨拶があった。
- ③ 評議員会を四月十二日午後一時より開催の予定。
- 会員異動
- 物故
- 松川由博 (二〇六三九) 98・7
- 木原貞治 (四八二八) 99・6
- 石田三喜雄 (九九二六) 00・2
- 小田部学 (三三八五) 00・3
- 相沢甚平 (七七五四) 00・3
- 復活 沼田 真 (九一〇五) 00・7
- 退会 さくら銀行山岳部 (三三三三) 00・7
- 田代弥生 (九八六五)

- 木内義忠 (九三〇)
- 松尾高林 (二三四四)
- 五十嵐トシ子 (二〇二五六)
- 白石栄三 (八八六四)
- 津田 正 (一一一五五)
- 越智英夫 (三三三八)
- 丸山博光 (九三九五)
- 佐藤春郎 (九三三三)
- 丸芳五郎 (四八八二)
- 沢田太郎 (一七六八)
- 三由利夫 (二〇九三三)
- 大場秀章 (一一二九六)
- 樋口 格 (九九三九)
- 板澤利幸 (二二三〇〇)
- 飯野頼治 (二〇六二六)
- 村田文祥 (二二二六五)
- 安藤信正 (八六三三)
- 北村 貢 (九四三六)
- 佐野剛平 (二〇三二)
- 江川利雄 (八一六一)
- 林 利之 (七〇六七)
- 高松武夫 (一一二二二)
- 花井 修 (二〇七四〇)
- 國光保雄 (六九七九)
- 石原順次 (八五二〇)
- 大木泰介 (一一八一七)
- 茂木義明 (一〇一七七)
- 加藤利雄 (六七〇七)
- 関口雅義 (七七〇八)
- 秋山光平 (九三二九)
- 中上和義 (七一七二)
- 山本治美 (四七二四)

INFORMATION



イラスト・村上直温

◆第二十回日本登山医学シンポジウムのお知らせ 医療委員会

第二十回日本登山医学シンポジウムが開催されます。会長は濱口欣一会員。山岳診療所と会場を衛星回線で結びライブで遠隔診断システムの実演を行うなど、注目のテーマが盛りだくさんです。

日時 六月三日(土)～四日(日)

会場 慈恵医科大学高木南講堂

注目のテーマをご紹介します

- ① 山本正嘉氏の教育講演「体力トレーニングの効果」
- ② 旅のドクター・荻原理江氏が構成するシンポジウム「海外トレッキングの問題点」
- ③ 濱口欣一氏の会長講演は高所トレッキングで今話題をよんでいる「ダイヤモンドの功罪」
- ④ 今回の目玉プログラム「二十一世紀の山岳診療に向けて」Ⅱ 檜ヶ岳診療所、常念診療所、信州大学病院救急部、そして会場の

慈恵大学高木南講堂を衛星回線で結び、ライブで遠隔医療診断システムの実演。うまく動くやら、乞うご期待！

連絡・資料請求先 濱口欣一

hamaguti@snh.hosp.go.jp

国立佐倉病院臨床検査科病理

TEL・〇四三・四八六・一一五二

FAX・〇四三・三三八・八六九六

〒二八五八七六五

佐倉市江原台二・三六・二

◆富士山の古道を訪ねて 図書委員会

スバルラインの開通によって、江戸時代からの富士吉田口は、五合目まですっかり古道となりました。その主要部馬返から佐藤小屋(標高差一四〇〇メートル、健脚向き)までを新緑に包まれながら訪ねる一日です。

日時 六月十日(土)

集合 馬返・九時(現地集合にて参加可)

コース 富士山・富士吉田口 馬返

より佐藤小屋まで

連絡先 藤井昭孝 (TEL&FAX)〇四二

四・七一・四一九〇)

*佐藤小屋宿泊希望者は六月三日までにFAXでご連絡ください。参加案内を送付します。

◆気象講座「夏の天気図の読み方」

科学委員会

今年の気象講座は、要望の多かつ

た天気図の読み方を学びます。多数ご参加ください。(参加自由)

日時 六月二十九日(木) 十八時三十分～二十時

会場 日本山岳会集會室

講師 城所邦夫氏(元日本気象協会)

問合せ先 北野忠彦(携帯電話・〇九〇・三〇四六・一一八九)

◆探索山行「上信国境の大分水嶺と高山植物を探る」 科学委員会

日本の水系を太平洋と日本海に分ける大分水嶺には不思議な魅力があります。普段気づかずに歩いたり越えたりしているこの大分水嶺上に建つロッジをベースに、周辺の景観や植生を観察しながら、分水嶺の魅力を感じたいと思います。

日時 七月一日(土)～二日(日)

山行 湯の丸山、池の平、高峰山

講師 柳沢孝氏(ロッジ花紋主人)他

費用 二万円(宿泊、バス代を含む)

集合 新宿駅西口 七時二十分

宿泊 湯の丸地蔵峠・ロッジ花紋

定員 先着四十名

申込 六月十日までにFAXかハガキ、Eメールで近藤善則宛

(二一七四・〇〇一三練馬区

豊玉中三・一四・四・二〇一

TEL&FAX・〇三・三九四八・〇

三〇四)

E-mail

kon5030@mb.infoweb.ne.jp

*申込者に詳細案内を送付します。
◆「フォーラムin秋山郷・苗場山」

自然と人間の暮らしを考える会
自然保護委員会後援

秘境秋山郷で交流集會を開催。のち苗場山に登り、湿原の自然観察を行います。別に北信地方周遊のパスの旅もあります。

期日 八月十九日(土)～二十一日(日)
場所 長野県栄村小赤沢及び苗場山日程

十九日 十四時現地集合 秋山郷総合センターにて交流集會(講演「秋山郷の暮らし」市川健夫/熊ひき歌/宮沢賢治「なめとこ山の熊」劇団芸協他)

二十日 A班||苗場山登山と自然観察会 B班||唱歌と童謡のふるさと北信地方を周遊

二十一日 下山 昼食後解散
費用 二万二千元(新宿発のチャーターバスを利用される方は往復運賃込みで三万四千元。定員に達し次第締め切ります)

問合せ・申込 ハガキで大山恭司宛
(〒323-0100) 〇〇〇五大宮市
小深作二二〇・八)

*希望者には詳細をお知らせします。
◆ストレッチング講座

山げらの会
毎月一回の道具を使わない筋肉トレーニングのエクササイズです。ご

参加ください。

日時 六月二十六日・十八時三十分
場所 日本山岳会ルーム
連絡先 参加希望者は三井まで
(TEL&FAX〇三・三四五一・五三八八)

*軽装、敷物をご用意ください。
◆加藤求二の「秩父の山小屋デッサン展」

東京銀座と雲取山荘の二カ所で開催します。
期日 七月十七日(月)～二十三日(日)
十一月十九時(最終日は十時)

会場 銀座煉瓦画廊(東京都中央区銀座七・八・八銀座倉橋ビル九階 TEL&FAX〇三・三五七一・八六二六)

期日 七月二十九日(土・十五時)～九月三十日(土)

会場 雲取山荘(秩父多摩国立公園・雲取山 携帯電話・〇九〇・九〇一一・三七八〇)

連絡先 加藤求二(TEL・〇四二九・八九・一八九六)

ルーム日誌

- 3月 財務委員会
- 2日 学生部 自然保護委員会
- 3日 トイレシンポ小委員会

4日 アルバータ実行委員会

6日 総務委員会

7日 常務理事会 アルパインスケッチクラブ

8日 理事会 会報編集委員会 やまげらの会 99同期会

9日 学生部 遭難対策委員会 山の自然学研究会

10日 フォトビデオクラブ

13日 新日本山岳志 総務委員会

14日 二火会 アルパインスケッチクラブ 95同期会 アルバータ実行委員会

15日 三水会 ジャック93会

16日 科学委員会 学生部 データバンク研究会 台湾地震募金世話人会

17日 資料委員会

21日 百年史委員会 総務委員会

22日 フィルムビデオ委員会 集會委員会

23日 図書委員会 アルバータ実行委員会

24日 学生部 98同期会

27日 山岳編集委員会

28日 青年部 アルパインスキークラブ 山の自然学研究会

30日 自然保護委員会 山げらの会

31日 学生部

99同期会

3月来室者551名

■訂正 四月(六五九)号六ページ一段三行目と写真説明の神永幹雄氏は神長幹雄氏の誤りでした。お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

会報編集人に任命されて丸三年になろうとしています。時の流れが速く、光陰矢の如しを強く感じます。毎月達成感に満たされるのは、JACの誇りある伝統と会員の熱い支援のおかげ、と感謝しております。会報は会員一人ひとりのものです。スタッフ一同、初心を忘れず全力投球しておりますので、いっそうのご協力をお願いいたします。

巻頭に日中友好登山二十周年記念事業の一つとして、秋に予定されている「日中学生友好登山」の北アルプス登山計画を掲載しました。活力あるクラブ運営の持続は、次世代を担う若者にあることは自明の理です。
(村井 葵)

日本山岳会会報 山 660号
2000年(平成12年)5月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 大塚博美
編集人 村井 葵
印刷 株式会社 双陽社